

また、原爆投下の意志決定に関する論文（アルペロウィッツ）は、この問題に関する私たちの未だにあやふやな知識をみごとに整理し、俗論を砕いてくれます。

アメリカの核兵器研究所の人々が、原爆をどう正当化し日常化しようとしているか（キリストでも原爆を落としたらう）を知る一方で、世界最大の原子力発電国フランスで、原発と共存すべく自己欺瞞の日々を送る原発労働者の生息は、同じように「原子力立国」をめざす日本の現状と比べ合わせて、何とも背筋の寒くなる思いでした。

日本の原爆思想は

最終章の「ヒロシマとアウシュヴ

イツをつなぐもの」(フロッサ)は、特にいいですね。これほど説得的に二つのつながりを思想的に述べたものは初めてで、いい勉強になりました。その意味で、この寄稿者陣にほとんど日本人を含めなかったことは、むしろよかったです。

「ナガサキの証言」に長年努力してきた長友鎌田定夫の「長崎原爆論」は、もちろん読ませますが、日本人は一般にこの本に展開されているような議論と省察は苦手です。日本の思想家は「ヒロシマ・ナガサキの思想」をついに生み出していません。あなたから寄稿を乞われた私は、それをいわば裏返しに試みようと思いました。日本の原水爆反対運動が問題を政争の具とし、自らを国際政治の力学の駒に化した過程を書こうと

したので。それができていたら、核をめぐる日本政府の二枚舌的発言を鋭くつく論文（セースレ）と対になり得たでしょうが、体調を崩して

できなかったのは残念でした。この本がフランスでも売れますように。
(そでい りんじろう)

エンゲルスと現代

杉原 四郎／降旗 節雄／大鼓 龍介編著



御茶の水書房 8755円

評者●加藤 哲郎（二橋大学教授）

エンゲルスはマルクス主義者であったか

一九九五年は、カール・マルクスの盟友フリードリヒ・エンゲルスの没後一〇〇年である。かつてなら国内外でさまざまな記念出版物が出たところだが、今回はやはり寂しい。本書と日本共産党系の出版物ぐらいのようだ。本書巻末で杉原四郎がト

リーズするように、エンゲルス生誕一五〇年、『反デューリング論』一〇〇年の時にもさまざまな記念出版

□編著者
すぎはら しろう 甲南大学・関西大
学名誉教授。
ふりはた せつお 帝京大学教授。
おおやぶ りゅうすけ 富山大学教授。

石橋湛山著作集 全4巻

第1巻 リベラリストの警鐘 第2巻 エコノミストの面目

第3巻(政治・外交論) 大日本主義との闘争
第4巻(文芸・社会評論／人物論) 改造は心から

鴨 武彦編集・解説 96年1月発売 定価2266円(税別)380
谷沢永一編集・解説 12月11日発売 定価2266円(税別)380

東洋経済新報社(定税込み)
〒103 東京都中央区日本橋本石町1-2-1

があった。その当時に比べれば、東欧革命・ソ連崩壊をくぐったわが国マルクス主義研究の沈没・様変わり、かくしようもない。本書は、その流れに敢えてさからい、六〇〇頁を費やして真正面からエンゲルスとマルクス主義を再考する。

そもそもエンゲルスはマルクス主義者であったか——本書の問いかけを要約すると、こう読める。終章杉原論文がトレースした日本の研究史を政治的文脈におき換えると、マルクスの盟友、「第二バイオリン」としてのエンゲルス紹介、ロシア革命後のレーニン、スターリンに祖述されたマルクス・エンゲルス一体説、スターリン批判に触発されたマルクス・エンゲルスの分業説の流れがあった。

オーケストラになぞらえれば、マルクス作曲、スターリン指揮、マルクス・レーニン主義交響楽団のなかでの編曲者エンゲルスの役割は、指揮者と楽団の盛衰に伴って、その歴史的评价が変遷してきた。一体説から分業説への転換のさいには、一方で『国民経済学批判大綱』や『ドイツ・イデオロギー』におけるエンゲルスの先行・主導が、他方で『自然

弁証法』や『反テューリング論』でのマルクスからの逸脱ないし単純化が問題にされた。

そのさい基準とされたのは、レーニンやスターリンの解説ではなく「マルクスに帰れ」の視点でエンゲルスを見ることだった。没後一〇〇年の本書の総体的印象は、ようやくマルクスの編曲者ないし「第二バイオリン」からも解放された、生身の独奏者としてのエンゲルス研究が本格的にはじまったことである。

「独奏者」への一五の視線

とはいえ、思想的出自も専門領域も異なる一五人がエンゲルスを論じるのであるから、その独奏者としての位置づけも、バックにマルクスの楽譜を流す手法も、それぞれ異なる。中野徹三、清真人、田畑稔は哲学から、降旗節雄、桜井毅、江夏美千穂は経済理論に即して、鎌倉孝夫、山口勇、福富正実、河西勝は社会主義論や農業農民問題にひきつけて、古賀秀男、大藪龍介、山内昶、青木孝平は歴史・国家論・人類学・家族論にしばって、それぞれに本格的論文を寄せている。

評者の観点から特に興味深かったのは、巻頭の中野論文が「マルクスを基準にエンゲルスを評価する立場」からも自由なエンゲルス研究を提唱し論じていること、田畑論文が

シュタルケ「フォイエルバッハ論」とエンゲルスを、河西論文が「エンゲルスとヒトラー」と題してヒルファディングとエンゲルスを、対比して論じている点である。青木論文は、現代フェミニズム批判をも射程に入れてエンゲルスとマルクスの家族論の異同を論じており、痛快である。

。杉原論文も触れているが、エンゲルスの政治論・軍事論や自然科学論についての論稿、特に晩年のエンゲルスの「政治的遺言」問題を論じた論文がないのは寂しい。しかしこれが、かつては対立・反目しあっていた諸学派を含む現時点での日本マルクス主義研究の総力を挙げた成果なのだろう。研究史的にはオリジナルで批判的な学術論文がそろって、没後記念としては異色の論集となっている。

(かとう てつろう)

安全と安心の経済学

島田 晴雄／大田 弘子編著

評者●陣峻 淑子（日本女子大学教授）



岩波書店 2300円

豊かさのリスクに囲まれた現代人への指針

利便性と効率化がすすむ社会の中で、便利と安楽、主体的な生き方を求める現代人が、その裏側でそれゆえに大きなリスクを負っている——

□編者 しまだ はるお 慶応義塾大学教授。
おた ひろこ 大阪大学客員助教授。

そのような社会そのものの分析と予防の社会的コストなどが、科学的に展開されているにちがいない——、と多くの人が、この書名から想像するのではないだろうか。だが、そのような予想に反して、本書は、むしろ保険会社の出す冊子や、新聞の家庭欄、社会面などに登場する記事に近い啓蒙的なハウツー